

レファレンス コーナー 中国の朝鮮族を知る

狩野修二

朝鮮族は中国で認定されている五五ある少数民族の一つであり、吉林省を筆頭に、遼寧省・黒龍江省など中国東北部に数多く居住している。

二〇〇〇年の人口センサスによれば、朝鮮族の人口は中国全体で約一九二万人おり、これは韓国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）以外に暮らす朝鮮民族の中で最も数が多い。

中華人民共和国建国当初より少数民族として認定されていた朝鮮族ではあるが、古くから中国に居住していた者はあまり多くない。大部分は、一九世紀中頃以降、貧困や飢饉を逃れ、新たな耕地を求めて移住してきた人々や、日本の朝鮮半島・中国東北部の支配・統治の結果として移住してきた人々とその子孫である。彼らが集住する吉林省延辺朝鮮族自治州や長白朝鮮族自治州などの地域では、政府により一定の自治権を与えられており、民族語による教育等を通じ、朝鮮民族としての言語や文化を保持することが可能となっている。

中国の改革開放政策や、一九九二年の中韓国交樹立、UNDPによる図們江地域開発計画などにより、中韓両国の言語を使用できる朝鮮族

は、北東アジア地域で活躍できる人材として注目を集めている。ここでは彼ら朝鮮族を知るための図書を紹介したい。

まず、彼らの歴史と現状を知るための概要書としては、延辺朝鮮族自治州概況執筆班著『中国の朝鮮族—延辺朝鮮族自治州概況』（むくげの会一九八七年）、高崎宗司著『中国朝鮮族—歴史・生活・文化・民族教育』（明石書店一九九六年）がある。前者は延辺朝鮮族自治州の事情のみについて扱っているが、朝鮮族を全面的・系統的に紹介した初めての資料であるといえる。後者は延辺だけでなくとどまらず、吉林省・黒龍江省・遼寧省の各市と、その他中国各地域の朝鮮族について紹介しており、同じ朝鮮族でありながらも朝鮮族人口の少ない地域では言語の保持もままならない現状を知ることができる。

また、鄭雅英著『中国朝鮮族の民族関係』（アジア政経学会 二〇〇〇年）では、日・中・韓三方国の様々な文献を用いて、歴史・民族教育・経済の現状などを詳細に解説しており、概説より一歩踏み込んだ論文集となっている。

朝鮮族が朝鮮半島から中国へと移住し、定住するまでの歴史について詳しく扱っている資料には、鶴島雪嶺著『中国朝鮮族の研究』（関西大学出版部 一九九七年）がある。また移民である彼らが中国少数民族の一員として認められる重要な過程の一つとして抗日闘争への参加があげ

られるが、このことについては、朝鮮族簡史編写組編『抗日朝鮮義勇軍の真相—忘れられたもうひとつの満州』（新人物往来社 一九九〇年）に詳しい。視点を変えて、移民の歴史を個々の体験から知るものとして、中国朝鮮族青年学会編『聞き書き朝鮮族生活誌』（社会評論社 一九九八年）がある。インタビュアーによって得られた移民一世たちの話は朝鮮族のきびしい歴史を生々しく伝える貴重な資料である。

中国でマイノリティとして暮らしている朝鮮族は、朝鮮民族としての社会・文化を保持しながらも、やはり中国社会の影響を受け、その中で変容を迫られる。韓景旭著『韓国・朝鮮系中国人—朝鮮族』（中国出版二〇〇一年）では彼らの民族意識やホスト社会である中国への適応についてフィールドワークを通じた分析を行っている。また佐々木衛・方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』（東方書店 二〇〇一年）では朝鮮族の中国でのアイデンティティや伝統文化の変容、家族のネットワークについて現地の調査をもとに考察している。彼らの民俗文化の現状については、日・中・韓の三カ国が「中国東北部朝鮮族民族文化調査団」という調査団を結成し一九九四年から一九九六年までの三年の歳月を費やし、東北三省の各地で調査を実施している。竹田昌編『中国東北部朝鮮族の民族研究』（第一書房 一九九九年）がその成果とし

て出版されており、今でも継承している文化や中国社会の影響を受けて変化した風習を知ることができる。

中国の改革・開放政策と中韓国交樹立は朝鮮族社会に劇的な変化をもたらした。親族訪問として韓国を訪れる機会ができたことをきっかけに韓国への出稼ぎが増え、また国内でも中国に進出する韓国企業によって、言語を共にする廉価な労働力として雇用され始め、国内外への移動を加速させた。こうした変化は彼らの活躍の場を広げ、経済的向上をもたらしたが、同時に朝鮮族集住地域の人口減少、それによる民族教育縮小など新たな問題も起こっている。金永基著『クロスボーダー移動と地域社会の再構築—中国朝鮮族の移住・適応・エスニック・アイデンティティの再形成』（富士ゼロックス小林節太郎記念基金 二〇〇六年）では韓国へ出稼ぎに行き定住化しつつある朝鮮族の韓国社会への適応とエスニック・アイデンティティの変化について考察している。また、中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』（アジア経済文化研究所 二〇〇六年）は、二〇〇五年に開かれた「在日本中国朝鮮族国際シンポジウム」の講演論文をもとに新たな局面を迎えた朝鮮族の国内外の状況と今後の展望について報告しており、最近の朝鮮族事情を知る最適な資料である。

（かのう しゅうじ／アジア経済研究所図書館）